

経営の収益性・効率性—IFCN 年次大会から

ポイント:

2025 年、多くの国で 1 頭当たり乳量や乳成分が向上
飼料効率＝飼料摂取量と乳量の関係に高い関心
酪農家に重要な投資分野、「飼料生産」や「技術」が上位

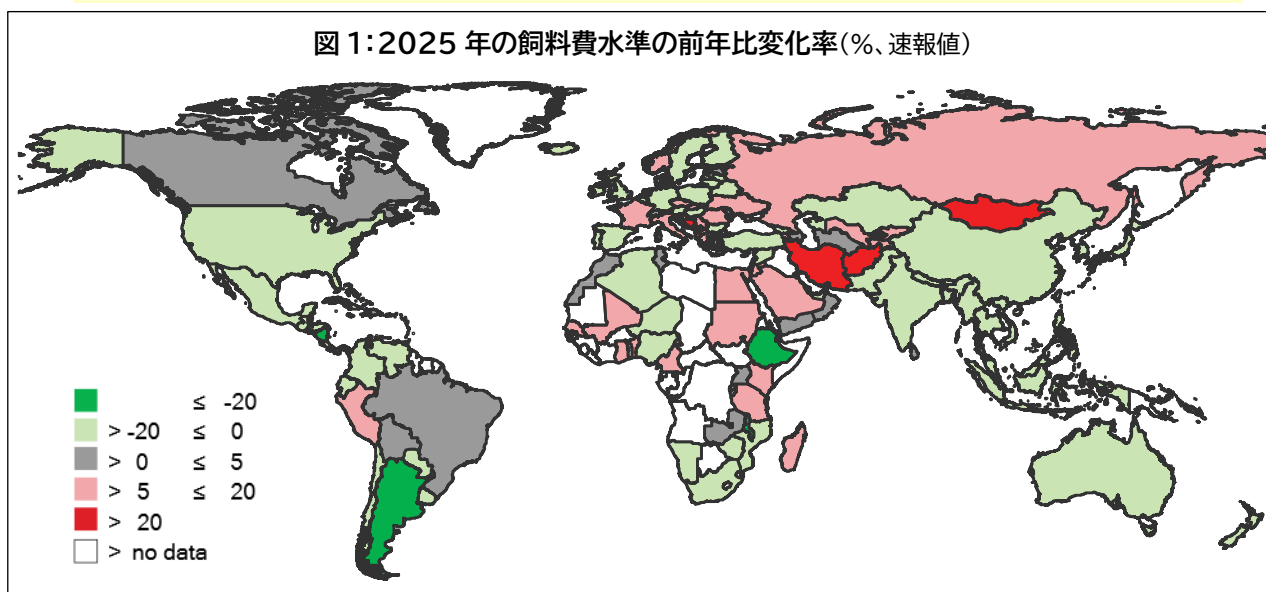
国際酪農比較ネットワーク(IFCN)は 2026 年 6 月、「酪農乳業の未来を築く——変化する世界におけるイノベーションと持続可能性」をテーマに、年次大会であるデリー・カンファレンス 2026 をオンラインで開催しました。酪農経営の効率性に関連して、多くの地域で飼料効率を重視する傾向が強いことや、酪農家の投資マインドをめぐり、将来の不確実性がなお大きいと感じられていることなどが示されました。要旨を紹介します。(注釈・補足や下線は「ミルクによります」)

【世界の 2025 年生乳生産量は大きく伸びた】

2025 年の世界の生乳生産量は約 10 億 2700 万トン(SCM＝固形分補正值*)で、前年比 2.6%増(インドとパキスタンを除いた場合は 2.5%増＝「ミルク」国際 Dairy レポート」2026 年夏号 p.18～19 参照)と、直近 10 年間で最も大きく伸びた。また、「IFCN 世界生乳価格指標」(*)は、前年比 11%上がって 100 キロ(SCM)当たり 48.9 米ドルだった。ただ、生乳価格が前年比 5%超のマイナスとなった国・地域もあるなど、状況には大きなばらつきが見られた。

* 注 IFCN は、生乳の量を示す際、比較可能性の観点から、そのままの重量ではなく「固形分補正值」(SCM = solid corrected milk)という数値を用いることが多い。乳成分を、脂肪分 4.0%、タンパク質 3.3%に標準化したもので、これにより、異なる乳成分構成間での価格など

図 1:2025 年の飼料費水準の前年比変化率(%、速報値)



の比較がより正確に行えるとしている。また、「世界生乳価格指標」(world milk price indicator)は、製品が世界のスポット市場で販売され、かつ標準的な製造コストで製造された場合に、乳業メーカーなどが生産者に支払うことのできる理論上の価格を表すものだという。

<https://ifcndairy.org/about-us/ifcn-dairy-research-network-method/>

また、2025 年は多くの国・地域で飼料価格が下落した。図 1(前ページ)は、飼料 100 キロ(30%の大豆粕と 70%のトウモロコシまたは大麦で構成されるものを想定)当たり価格の前年比変化率を示し、灰色と緑色は、飼料価格が安定していた、または下落したことを意味する。ただ、輸入に依存する市場や、国内市場の影響を強く受ける市場では、依然として飼料価格の圧力に直面した。したがって、酪農場の収益の良否は混在的な状況だったといえる。飼料価格の下落は多くの地域で助けになったが、最終的な生産インセンティブは、各国・地域の生乳価格や生産システムなどにも左右された。世界全体としては生産環境は好ましかった。

さて、生乳生産を押し上げた主な要因としては、上記の他に、1 頭当たり乳量の伸び、水牛を含む乳用動物の頭数増などが考えられるが、乳量は、乳成分の面でも押し上げられていた。自然含有量、つまり実際の生乳量のベースで世界の生乳供給を見ると、増加率は 2.5%だったが、脂肪分とタンパク質分を考慮した固形分補正值つまり SCM ベースで見ると、2.6%の増加となる。

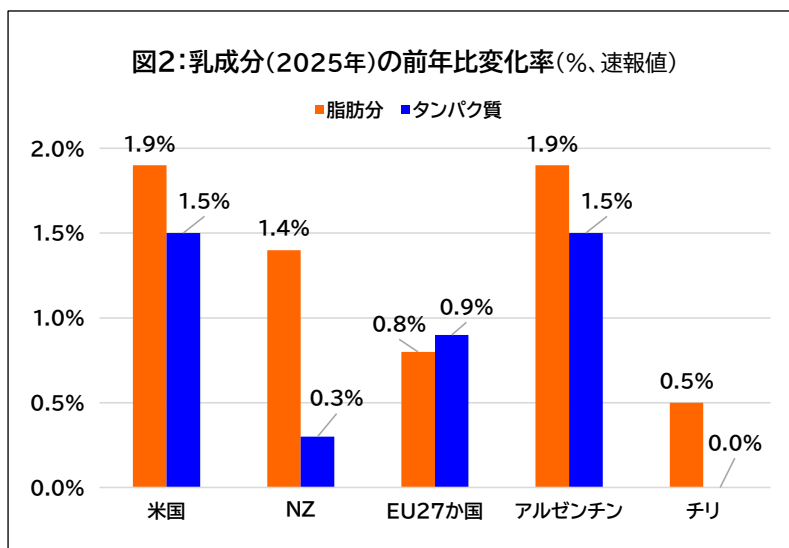
乳成分の向上をもたらした主な要因は何だったのか。特に目立ったのは、2025 年は世界的に比較的良好な天候条件に恵まれたことと、主要生産国で良質かつ十分な量の飼料が供給されたことだ。同時に、2024 年と比べると、特に先進的な酪農地域での家畜疾病の影響は、相対的に小さくなっていた。

図 2 は、主要酪農国・地域の乳成分(2025 年)の前年比変化率を示している。目立つのは米国とアルゼンチンで、乳脂肪分とタンパク質が大きく伸びた。一方、EU については、二つの成分のバランスがとれた状況が見られる。ニュージーランド(NZ)では、主な牽引(けんいん)役は乳脂肪分だった。

【酪農経営体の利益は】

世界の各地域で、経営体としての利益は 2025 年、前年に比べてどのように変化したのか。これについても、さまざまな要因により状況は異なった。

例えば欧州と CIS(ロシアなど旧ソ連構成国)では、生産費が平均して 100 キロ当たり約 1 米ドル上昇した。東欧・CIS に絞って見ると、100 キロ当たり約 4 米ドル上昇した。一方、経営体の利益は、例えば西欧では約 6 米ドル、東欧・CIS では約 2 米ドル上昇した。特に農場渡し生乳価格の上昇によって牽引され、好天候も要因となった。一方、北米を見ると、生産費が約 1 米ドル低下した



にもかかわらず、利益は約 2 米ドル低下した。ここでも主要因は農場渡し生乳価格だが、北米ではその水準が弱含みだった。アジアでは、コスト上昇が利益率を低下させたが、その影響はそれほど深刻ではなかった。一方、オセアニア、中南米、アフリカでは、良好な生産条件と市場条件が、生乳生産費の低下と収益性の向上を支えた。

【1 頭当たり収入、欧州やオセアニアは高い】

酪農経営の収益性は、生乳価格や生産コストだけでなく、農場のシステムや生産性向上の度合いなどによっても影響されるということはもとより明らかだ。

これらを左右する「効率性」について、各国・地域でそれを測るために一般的に使われている指標は何かを調査したところ、生乳生産量やコスト、収益性などを含む、「経済的生産性」と分類できるものが最多だった。2 位は「飼料効率」、つまり飼料摂取量に対する生乳生産量の比率だった。

なお、経済的生産性を見る際、1 頭当たり収入という指標を用いることがある。世界各地域の 2025 年の 1 頭当たり収入は、西欧、東欧・CIS、オセアニアが高い水準にある。2025 年と 2024 年の地域別 1 頭当たり収入を比較すると、欧州やオセアニアは大きく向上、北米と中東周辺は低下した。北米と中東周辺の低下の主要因は、生乳価格、あるいはインフレ率や為替レートの変動にあるとみられる。このような分析により、効率性が向上したのか低下したのか、その動向を把握できる。

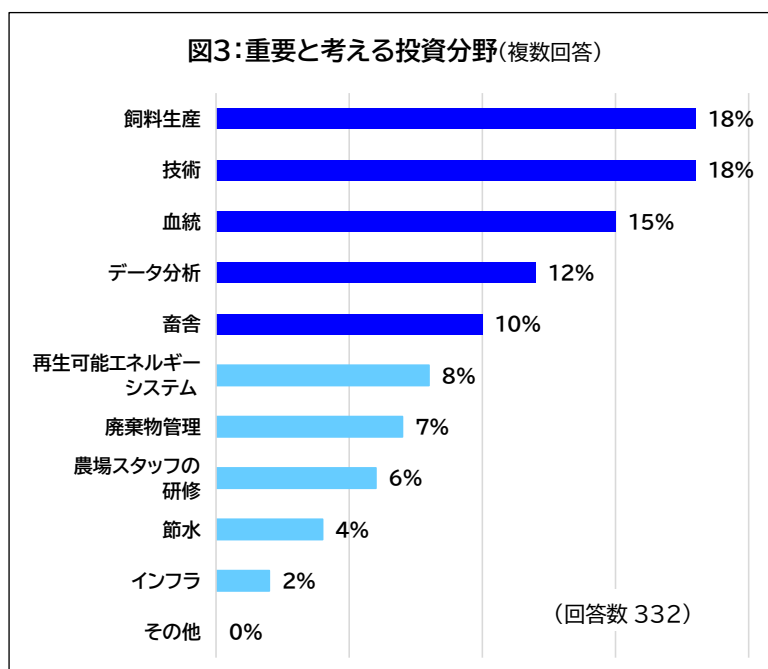
【集約度の高い農場では飼料効率が高い】

飼料効率は、乳量と飼料摂取量の関係を示すものだ。ドイツ、米国、中国、日本の典型的な農場のように、高度に集約的なところでは、飼料効率が高い傾向がある。高泌乳牛が、飼料をより効果的に乳へと変換できるためだ。対して、インドの農場や、ナイジェリアのようなアフリカの一部の国に見られる泌乳量が低い牛は、飼料効率の水準が低い。また、農場システムによっても飼料効率は違ってくる。例えばニュージーランドやアルゼンチンのような放牧システムの農場では、一般的に濃厚飼料の量が少なく、結果、乳量は集約的な農場システムより低くなる傾向がある。そのため、飼料効率は中程度になる。

【今後の投資マインド、大部分が「中立」】

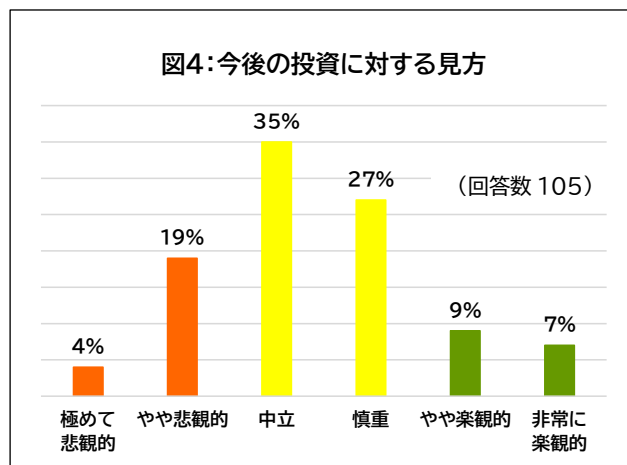
さて、飼料効率の改善には、さらなる投資が必要になることが多い。では、酪農家はどこに、農場パフォーマンスを改善するための投資機会を見いだしているのか。

効率性向上と管理の最適化というテーマのもとで、どんな投資が重要



になり得るのか、IFCN のネットワークを活用して関係者に調査したところ、多くが、「飼料生産」と「技術」を最も重要な投資分野として評価していることが分かった(図 3=前ページ)。続いて血統、データ分析、畜舎への投資などが挙げられた。

また、今後の投資に対する見方の調査結果を図 4 に示しているが、かなり中立的または慎重な姿勢が見られた。非常に楽観的とする回答は一部に限られている。2025 年は、財務上ではより強い結果が得られた(ところが多かった)にもかかわらず、投資マインドは明らかに大部分が中立にとどまっている。将来に対する不確実性が、楽観的な見方よりもなお大きいことを示している。



海外でいま、何が酪農家の関心を集め、関係者の間でどんな議論が交わされているのか。Jミルクは、国際団体・組織が開く会議やイベントなどから、日本の酪農の課題解決のヒントとなる情報を「海外酪農の“いま”を探る」と題してお届けします。